

生活史研究の系譜

—— 記述と分析をめぐる課題 ——

中野 加奈子

〔抄 録〕

生活史はもともとソーシャルワーク実践には馴染みのある語であり、社会福祉の様々な領域で当事者理解や生活問題の把握のための資料として用いられてきた。

一方で、生活史を用いた研究は社会学や心理学では古くから取り組まれてきた。社会構造の把握及び人の行為の理解等のために、集団そのものから集団を形成する個人へ関心が移り、そこに生きる具体的な個人の理解を通して集団の構造や行為理論が考察された。そして客観的で普遍化・一般化可能な理論構築のために生活史は理論を導き出すための資料として用いられ、その際、敢えて個別特殊性を捨象する視点も現れるなど、生活史の記述と分析をめぐる議論が活発に行われてきた。それぞれの学問が目指すものは異なり、それによって生活史の記述や分析、そして解釈の視点も変化する。これまでの議論においては、「誰の」生活史か、生活史の「何を」「どのように」記述するのか、そして生活史を「どのように」分析するのか、といった課題があると整理できる。

現実に生きる個人に関わるソーシャルワーク研究の場合、社会学や心理学が目指す普遍化・一般化のための生活史研究をそのまま応用するだけでは不十分である。ソーシャルワークが取り組むべき生活史研究の方法について、社会学・心理学での議論から、乗り越えるべき課題を検討する。

キーワード：生活史，個別特殊性，法則定立的方法，ソーシャルワーク

はじめに

「生活史」という言葉はソーシャルワーク実践においては馴染み深い語である。それは「成育歴」「生活歴」等いくつか類似の語が用いられているが、多くは当事者の生涯や彼らの所属する家族の生活の歴史を指している。そして、児童、高齢者、障害者等社会福祉のどの領域においても、生活史は当事者の理解や生活問題のアセスメント及び支援計画には欠くことのでき

ない情報であり、資料となっている。特に、ソーシャルワーク研究は、アセスメント方法や面接技法といった形で生活史の情報収集及び分析に常に関心を持って関わってきた。今、目の前の当事者が抱え困り果て、ソーシャルワーカーに語ろうとしている生活問題の諸相とはどのようなものなのか。その発生の起源はいつか。どのような過程で形成され今に至るのか。これらの疑問は、ソーシャルワーカーであれば常に念頭にある。実践科学であるソーシャルワーク研究は、目の前の当事者の生活史を記述するだけではその役割は果たせない。具体的な生活問題の把握、その構造の解明、問題の改善・解消という支援過程に役立つ生活史としてまとめあげることが求められる。

では、支援過程に役立つ生活史として、私たちは当事者の何をどのように把握し理解し分析し、記述しなければならないのか。本稿では、ソーシャルワークにおける生活史研究の課題を検討するために、主に社会学、心理学における生活史研究の歴史を振り返り、記述と分析をめぐる議論の主な論点を整理していく。

第1章 初期の生活史研究

生活史に関わる理論研究を振り返る前に、本論で用いる「生活史」について若干の定義をしておきたい。『新社会学辞典』では「生活史」は以下のように記述されている。

基本的には、個人の生涯を社会的文脈において詳細に記録したものをさす。しかし日本語で「生活史」という場合、歴史学・民俗学の分野などから集団や地域全体の「生活の歴史」という意味で用いられることもある。英語におけるライフ・ヒストリーは、個人の一生（人生）を個性記述的アプローチによって描いていくことをさしている。したがって、生活史という概念は、ライフ・ストーリー、個人史、事例史、個人的ドキュメント、ライフ・ストーリーなどの関連概念や派生概念を含む包括的な概念である。

生活史の資料としては、自伝（援助を受けた自伝と素朴な自伝）、伝記（個人誌）、個人的記録（日記、手紙）、人間的記録（手記、作品）、生活記録（経歴、履歴）などがあり、特に対象者の人生（の一部）を本人の口述や筆記をもとに調査者が再構成した作品をライフ・ストーリーとよぶ。

この定義からは、①誰の生活史か、②何が生活史の資料なのか、という二つの疑問への答えが読み取れる。まず一つめの疑問への回答は、「個人の生涯」を取り扱う場合及び、「集団や地域全体の生活の歴史」を取り扱う場合があるということ。二つ目の回答は、それら生涯や歴史を明らかにする資料としては、自伝・伝記・個人的記録といった当事者及び第三者によって記述されたものと、調査者が本人の口述や筆記を元に再構成したライフストーリーがある、ということである。

本論では、ソーシャルワーク実践に関わる生活史研究に焦点を当てる目的から、①ある個人の歴史・生涯を中心に、その個人が所属する家族や集団の歴史を取り扱うもの、②インタビューを元に再構成したライフストーリーを主としながら、その他の記録や第三者の発言等も資料の一部に含むもの、として定義したい。

第1節 人類学と生活史

伝記や生活史は、文学あるいは歴史学における重要な資料、医学における症例研究等さまざまな学問領域で用いられてきた歴史がある。人類学者ラングネスは「人類学におけるライフヒストリー法は、アメリカインディアンからはじまった」と述べている。当初は、ほとんどその実態が理解されていなかったアメリカインディアンの未開文化や独自の生活様式を明らかにすべく、A. L. クローバー『グローベンターの民族』(1908)、V. ワトソン『ポカホントス王女』(1916)など、部族首長の伝記等が盛んに記されている。しかしこの研究関心は次第に「あらゆる種類の『逸脱者』、あるいはふつうではない人々の人生にも同じような関心を寄せて」くるようになり、そして実際に、貧困、黒人、移民等を対象にしたおびただしい数の伝記が記されている、と指摘している (Langness=1993: 22)。

なぜ、人類学は生活史に着目したのだろうか。その理由としてラングネスは「①文化を描写するため、②文学的目的のため、③文化変化の様相を描くため、④ほかの手段ではふつう描写できないような文化のある様相を描くため (たとえば、女性の視点からみた文化など)、⑤ほかの方法では伝達できないようなことを伝えるため (たとえば、人類学的人間的な側面、あるいはもっと典型的には、文化の「内部の」視点など)、⑥逸脱者、あるいはその他のふつうでない事例について述べる時」の6つを挙げている (Langness=1993: 32)。すなわち人類学は、ある集団の文化や社会を理解する関心から、従来は集団そのものに着目・観察視点を置いてその集団の固有の文化や生活様式を明らかにしていたが、それだけでは十分に拾い上げられない側面にも着目点を広げ、そこに生きる諸個人の生活史を通して集団の様相をより詳細に明らかにする研究へと移行した。そして、これらの伝記や著作により、人類学は人類が形成している社会や文化の様々な形態を、そこに生きる人びとの生活や人生を通してより詳細に明らかにしていくこととなった。

1900年代初頭における生活史に着目した人類学の研究は、文学として、また社会学、心理学、精神医学等様々な学問領域に成果をもたらした。生活史への着目を通して社会と個人の双方に視点を向けたという点で、この領域における研究はその後の生活史研究の発展に大きな役割を果たしたと言える。

第2節 『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』の登場

人類学が生活史に着目し始めた時代には、社会学や心理学等の関連学問領域においても積極

的に生活史を用いた研究が行われるようになった。その中で最もエポックメイキングな著書は、トーマスとズナニエツキによる『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（1918～1920）（以下、『ポーランド農民』）である。何故、本書が生活史研究で重要な意味を持つのだろうか。

19世紀末頃のポーランドでは、ロシアによる支配が強まり教育や信仰等にさまざまな制約がもたらされるようになったり、工業化の果てに従来の生活基盤が崩れ現金収入が必要となった農民たちが、農村から都市へ、そしてアメリカへ移住するようになった。しかし新天地であるアメリカに移住したポーランド農民たちは新しい社会に適応することが難しく、その不適応が社会問題化していた。このような状況に関心を持ったトーマスとズナニエツキは、ポーランド人の自伝や手記、本国の親族との往復書簡等の資料を収集し、家族や共同体の変化を捉えようとした。『ポーランド農民』で用いられた「資料」は往復書簡や新聞記事、自伝など多様なものであった。さらにその量も膨大で、往復書簡については800頁にわたり50家族、764通が収録されている。この膨大な個人的な資料を調査に用いたということ、そして個々の生活史から社会や人びとの行為の仕組みを導き出したという点で、そして最も重要なことには、これらの個人的資料を用いる研究方法を確立したという点で、生活史研究上の本書の重要性が決定づけられている。

高山によれば、『ポーランド農民』以前の社会学では①イギリスの社会哲学者 H. スペンサーに影響を受けた大規模で思弁的な社会進化論的な論説、②ピッツバーグ調査のように、スラムなど特定の問題について詳細なデータを集める社会踏査、という二つの流れがあった。それぞれの特徴について「社会進化論的な論説は発生学的な原理を普遍的に社会に応用するが、それぞれの社会の固有性を無視し、少数の原理で複雑な社会の仕組みを分析することは難しい」「社会踏査では詳細な調査データを集めたが、分析が常識の範囲を出なかった」と説明している。そして、これらの欠点を克服するために必要なものとして、①実際に暮らす人々が「何を考え、どのように行動し、その結果、何が起きたのか」がわかる「資料」、②その資料を適切に解釈する「概念」、③場当たりの解釈にならないように、概念に一貫性を与える「理論」が必要となった。そして『ポーランド農民』はこれらの条件を達成したものであった。と述べている（高山 2003b：92-93）。

また、ブルーマーは、トーマスとズナニエツキが「科学的な社会調査と科学的な社会理論のための基礎を構築しようとした」と評価し、以下の4つの考察を行った、と述べている。一つは「複雑な文明社会の中の生活に適用できるアプローチを構成しようとしている」こと、二つ目に「人間の社会生活で生起する変化や相互作用に固有の性格に適合するようなアプローチの必要性」、三つ目は「主観的な要因をキャッチして、それを客観的な要因との相互作用において研究できるようにする方法を開発すること」、最後に「社会生活を研究するためには理論枠組みが必要だという認識」である。特に、トーマスとズナニエツキが「人間の社会生活に固有

なことは、客観的な要因に加えて、主観的な要因が存在している」という、一見当たり前のような事実に着目したこと、及び主観的側面を客観的にアプローチする材料として「ヒューマンドキュメント」を用いたことを評価した (Blumer=1991: 152-155)。

『ポーランド農民』における基本的理念枠組は「個人と社会の相互作用」であると高山は説明している。

個人と社会は、互いに依存しており、片方だけでは存在できない。したがって、社会の変化を説明するには、両者の影響関係にこそ注目しなければならない。こうした観点によって、社会が個人の行動を規定する側面だけでなく、個人が社会を生み出す側面も考察できる。(高山 2003b: 95)

個人は社会を構成する部分であり、また人びとの集合である社会は個々人を規定する。このような相互関係の中で個人と社会の双方に視点を向けてみると、状況における個人の行為や態度と、それを裏付ける価値に現れた変化が、社会構造にも大きく影響していくことがわかる。トーマスとズナニエツキは「個人と社会の相互作用」という理論枠組を設定し、膨大な個人的資料の丁寧な分析を通して、ポーランド農民社会の解体と再構築、また移民となったポーランド農民の新天地での適応・不適応の様相を描き出したのである。

第2章 生活史研究の確立

第1節 シカゴ学派

『ポーランド農民』の研究スタイルに影響され、個人的ドキュメントを用いたモノグラフが多く記されるようになった。それらは主にシカゴ大学社会学部（社会学部がアメリカで初めて設置された）で取り組まれて、一連の研究は「シカゴ学派社会学」と呼ばれている。

研究対象は移動労働者、非行、スラム、麻薬等様々な領域にわたり、なおかつ研究手法も多様になっていった。例えば、N. アンダーソンの『ホーボー』(1923)は、アンダーソン自身が「ホーボー」(「ホボヘミア」=渡り労働者、いわば日雇労働者のようなもの)を少年期に経験していた。彼はその経験を元に、シカゴ市内のホームレス居住地区に出向いて道端に座って観察したり、ホーボーらと食事を共にしながら、彼らの生活を克明に記述した。その内容は、食事、宿泊、知的生活等ホーボーの生活の有り様だけではなく、何故彼らが家や家族を離れ放浪生活を送るのか、その生き方や人間関係、心理的な要因についても解き明かそうとした⁽¹⁾。また、C. ショウの『ジャック・ローラー』(1930)では、ショウ自身が非行少年の収容施設に入り込み、プロベーションオフィサー (probation officer 保護観察官) という職員としての立場から、非行少年や家族と関わりを持った。そして、非行が多発する地域の特徴を統計的資料で明らかにしつつ、さらに非行少年自身が書いた生活史 (自伝) を用いて、非行という逸脱行為を生み

出す社会的要因と、それが非行少年にはどのように映っていたのか、その少年の内面をも捉えようとした。W.F. ホワイトの『ストリート・コーナー・ソサエティ』（1943）はボストン市内のイタリア系スラム・コミュニティの参与観察調査であり、非常に著名な研究である。本書ではストリートの周辺にたむろする若者やギャング集団に個人的な関わりを持ち、彼らの関係性の変化や集団での役割等を解き明かした。インタビューや、フィールドノーツを用いて会話内容やその場の雰囲気等を記録し、それらを研究資料として用いている。

シカゴ学派の社会学では、『ポーランド農民』が活用した日記や手紙のような資料のみならず、調査者自らが調査対象者と関わったり、地域に入り込んで観察するといった参与観察法が盛んに取り組まれた。そして上記のような著作によって、社会や家族、都市といった社会の構造や人びとの行為等に関する理論を構築すると同時に、生活史（自伝や聞き取りによるもの）、手紙、新聞、写真等様々な個人的ドキュメントを用いた質的研究法を確立した。

第2節 シカゴ学派とハルハウス

初期シカゴ学派の研究はアメリカにおけるセツルメント運動として著名なハルハウスとの関係が深いことが指摘されている（中村 1992；秋元 2001；高山 2003a）。

当時のシカゴでは、産業化や都市化の進展に伴って、移民や人種差別、貧困層の増大といった様々な社会問題が発生していた。J. アダムスはこのような問題状況にある人々への支援及び社会改良を目指してハルハウスを設立し、セツルメント運動に取り組んでいた。そして、シカゴ大学の設立はハルハウス設立の3年後、1892年のことであった。初代社会学部長であるスモールはたびたびハルハウスを訪れ、アダムスもシカゴ大学の公開講座で授業を行うといった交流があった。特にスモールは社会改良に積極的な立場を示しており、「社会を改善する仕事に積極的に参加することが、学者であることと市民であることの両者の価値を高めると主張していた」という（高山 2003a：80）。また、『ポーランド農民』を記したトーマスもハルハウスへ出入りし移民問題に触れる中で研究の着想を得て、さらに調査研究の費用はハルハウスを支援していたカルヴァーからの援助を受けるなど、ハルハウスとの交流は密接なものであった（秋山 2001：297）。

しかし、ハルハウスとシカゴ学派社会学の交流は長くは続かなかった。そこには、ハルハウスにおけるソーシャルワークの実践目的とシカゴ学派の研究目的との相違があるという。アダムスが目指した社会改良と、シカゴ社会学が目指した客観性・科学性の確立のすれ違いについて、秋元は以下のように説明している。

ハル・ハウスの人たちは、コミュニティの欲求に応じる資料の収集を助け、また社会的な研究や分析を支援することになったためらいもしめしはしなかった。しかしひとたびそれが改良の意図を失い、たんなる観察の客体としてコミュニティやその住民の生活をとらえようとしていったとき、激

しい拒否にであうことになる。それは、セツルメントがあくまでも参加者によってなりたつものであって、観察者によって振り回されたり、その道具ではないことを考えるならば、当然の帰結であった。(秋元2001:301)⁽²⁾

こうして、ハルハウスは社会改良を目指す実践として、シカゴ学派は社会改良主義を脱しより完成された科学として、それぞれの発展を遂げることとなった。

第3節 シカゴ学派の衰退と再興

生活史研究はシカゴ学派を中心に積極的に取り組まれた一方、個人の生活史をデータとして用いることへの疑問も生まれてきた。生活史は確かにある個人の人生がいきいきと描かれ、非常に魅力的な資料である。しかし、手紙や語り等で得られたデータの整理は非常に手間がかかるものでもあった。さらに事実の受け止め方が個人によって変わるということを考慮すれば、それらのデータは果たして客観的な事実なのか、そこから一般化可能な理論を導き出すことは可能なのか、という疑問も生じてきた。そしてシカゴ学派内では量的分析と質的分析による結果の一致度が高いと指摘する研究者も現れ、量的調査への関心が高まった。

また、社会学ではパーソンズ、マートンが登場し、統計的分析を多用した量的調査が行われるようになった。パーソンズは『社会的行為の構造』(1937年)を発表し、社会学における統一理論の構築を目指した。このような変化の中で、個人的ドキュメントを用いた研究の客観性、法則定位性の脆弱さが指摘されるようになり、質的分析よりも手間が省け、さらに結果の整合性も持ち合わせる量的分析へと社会学研究の方法はシフトしていった。こうして、個人的ドキュメントを用いた研究方法は後景に追いやられるようになった。その原因については、プラマーは下記のように分析している。

個人的記録が社会生活上の観察事実と深くかかわっているにもかかわらず、人間のそうした私的記録は、実証主義の特質である数量的測定方法や、普遍化・一般化による法則定立的方法の探求に結びつけることができず、両者による科学的方法の「統合」を促す役割を殆ど果たせないでいる。もし、この個人的記録を巧みに使いこなしている例が見いだせるとすれば、それは人文学に関連する領域—つまり文学や芸術の分野であっても、社会科学の領域ではない。しかも、そうした人文学的領域での試みが、個人的記録の研究をすすめるうえでのモデルになっているのだ。第2の理由としては、実証主義に対抗してリアリズムや合理主義に向かう趨勢が見られることであり、さらに瑣末な日常減少への関心をマージナルだとみなす理論至上主義思潮が主流を占めていることにもよる。(Plummer=1991:3-4)

ここで指摘されたように、これまで取り組まれてきた個人の生活史を取り扱う研究は、個人

的な記録から普遍化・一般化による法則定立的方法の確立までには至らず、社会学が志向した科学性に十分な答えを用意できなかったのだといえる。

しかし、1950年代の終わりになると、C. W. ミズルが「個々の人びとの成功と失敗にかんする諸事実が、同時に現代史の諸事実である」「一人の人間の生活と、一つの社会の歴史とは、両者をともに理解することなしには、そのどちらの一つをも理解することができない」と述べ、個人史と社会構造と歴史（社会史）の三つをめぐる問題関心を喚起した（Mills=1965：3-4）。ここから、社会学における生活史研究の再興が始まった。その頃には、O. ルイスが『貧困の文化』（1959）、『サンチェスの子どもたち』（1961）を発表した。ルイスは『貧困の文化』において、ある家族の一日について、家族構成員一人ひとりへのインタビューを行い、同じライフイベントを経験している同一家族の構成員でもその出来事の受け止め方が異なることを明らかにした。ルイスはこの手法を「羅生門の方法」と名付けている。ルイスはインタビューを行った貧困層の家族のそれぞれの行動や考えから、貧困文化の様相を記録しており、その著作は非常に興味深い。

また生活史研究は、1950年代のアメリカ公民権運動を背景に黒人達の生活に関心が持たれるようになったり、文字では記録を残してこなかった労働者階級の人々のオーラルヒストリーを記録し、生活実態を明らかにしようとする研究者達によって、改めて積極的に取り組まれるようになった。同時期には国際社会学会でライフヒストリー研究のセッションがもたれたことも契機となり、この研究手法に世界的な関心が高まった。そして日本でも、中野が岡山県に住むある高齢女性の個人生活史を聞き取った『口述の生活史』（1977）が発表され、庶民生活史研究会による『同時代人の生活史』（1989）では、同じ時代に生きた全国各地の庶民、例えば開拓農民、離島出身者、海女、主婦、野鍛冶、鉱山労働者、失対日雇労働者、木賃宿の住民、地方政治家を取り上げ、それぞれの生活史をまとめる著作が発表された⁽³⁾。

また研究手法では、特にインタビューにおいて録音機器が用いられるようになり、インタビューの方法、記録について関心が持たれた。さらに構造主義等の理論が発展してきたことにより、インタビューの場における調査者と被調査者の相互作用に着目されるようになった。

第3章 資料の解釈・分析・記述をめぐる課題

第1節 客観性・科学性と個別特殊性

ブルーマーはシカゴ学派を代表する研究者であり、『ポーランド農民』を批判的に検証した。特に、個人的ドキュメントについては4つの基準を示しながら、『ポーランド農民』で用いられた資料がその基準を満たしていない、と指摘した。4つの基準とは①データの代表性 (representativeness)、②データの適合性 (adequacy)、③データの信頼性 (reliability)、④データの解釈の妥当性 (validity) である。(Blumer=1983：183) さらに、ブルーマーはトーマ

ストズナニエツキが用いた「態度」「価値」といった概念や「個人と社会の相互作用」といった理論枠組みが、必ずしも個人的ドキュメントから導き出されたものではない、とも指摘した。このブルーマーの指摘は「資料をどう解釈するか」という問題を提起している。資料から理論概念を導き出す為には、資料の解釈が前提となる。しかし解釈を行う研究者が持つ知識や経験、関心、価値といったものによって、解釈は左右される。研究対象を熟知している研究者であれば、個人的ドキュメントから多くのものを探し出すことができるが、その逆の場合は至難の業となる。このことからブルーマーは「ドキュメントはそれを解釈する理論との関連のみで意味を持つが、理論の妥当性は通例ドキュメントによっては決定できない」と指摘し、資料と解釈の関係を問い直した (Blumer=1991: 161)。

一方、心理学者である G. W. オールポートは、『ポーランド農民』によって、個人的ドキュメントの活用についての方法論的な問題に社会学者や心理学者が関心を持ち始めることになった、と指摘している (Allport=1970: 19)。また資料と解釈の関係については、ブルーマーの指摘を受入れつつ、下記のような疑問も示した。

……彼 (註: ブルーマー) はいそいで二つの重要な保留条件を付け加えている。すなわち (I) 科学的な価値がまったくないとみなしてこれらのドキュメントをしりぞけてしまうことは、「それらに注意ぶかく読むことによってもたらされる、理解と洞察と評価を無視する」ことになる、と彼は述べている。さらに、(II) 集会的にとりあげれば、これらのドキュメントはずっと効果的になる。というのは、ドキュメントの数がきわめておおいから、総合すれば、一貫性をもった像をむすぶことができるからである。つまり数の絶対量が、これらのドキュメントに、「無視することのできない、代表性と一定の適切性と信頼性」をあたえることができる、と彼は考えている。したがって、ブルーマーの考えによれば、もしもその数が十分にあれば、個人的ドキュメントは科学的容認性の四つの基準のうち三つをみたし、すぐれた証拠になることができる。しかし、社会科学者の手もとに採用すべき個人的ドキュメントが一つしかないばあいのディレンマを考察しようとする、この好意的な結論だけでは不十分である。(Allport=1970: 21)

オールポートは、事例数の絶対量によって事例の代表性が担保されるというブルーマーの主張に対して、「おおくの人生がとりあげられるほど、それだけますます共通の側面はすくなくなり、ついには、人間性の普遍的な法則のやせこけた枠組みだけがのこることになる」と、多数の事例から帰納的に理論を構築しようとする際の陥穽について指摘している (Allport=1970: 64)。そして、次のようにも述べている。

個人的ドキュメントは、集団研究において有益に採用されてきたけれども、もっぱら法則定立的な観点ばかりがはばをきかせているかぎり、社会科学と心理学にたいするその貢献を十分に評価す

ることは不可能である。パーソナリティの特異なパターン化に思いをめぐらすこと、合法則性は母集団における生起の度数と同義である必要はないと認めること、予見と理解と制御という科学的な目標は、一つの事例を、まさに一つの事例だけをとりあつかうさいにも達成することができるかと認めること——これらを認めるにやぶさかでなくなつてはじめて、われわれは個人的ドキュメントの十全な価値を評価することができるようになるのである。（Allport=1970：66）

オールポートは「単独事例を用いた研究は法則定立的方法としては十分ではない」と、個人的ドキュメントの持つ可能性を否定するのではなく、単独事例からも普遍性や一般性を導き出すことで、個人的ドキュメントの価値を真に評価することができる、という立場にあった。このようにオールポートの指摘がブルーマーの考えと異なるのは、社会学が社会の概念化や社会システム等を明らかにしようとした方向性と、人の内面や思考により着目する心理学が目指す目標との相違の結果であろう。

このような法則定立的方法と、個別事例研究方法との関係を私たちはどのように考えなければならないのか。確かに客観性・科学性を追求するならば、多数の事例から帰納的に一般化可能な概念抽出を行っていくことは必要不可欠な手順であろう。実際、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を生み出した木下は、M-GTAと事例研究の違いを以下のように述べている。

個々のデータ提供者の個別的特性はこの分析法では取り上げない——そうするのが有効な場合は（中略）事例研究がある。なぜなら、老妻を介護している特定の個人だけそれを理解するのが目的ではなく、「老妻を介護している夫」について説明力のあるグラウンデッド・セオリーを得ようとしているわけで、そのために分析焦点者という形である程度限定した集団の視点を導入しているのである。（木下 2009：22-23）

M-GTA はデータ提供者個々の特性は捨象し分析焦点者の視点で分析をまとめていくのであるが、この作業は1人の人を1人の人として理解することを踏まえた上で行われる必要があると考えている。つまり、個別特性の捨象は分析結果の一般化可能な範囲を確保するため必要な、意図的なことであり、仮に個人特性をそのまま活かした記述が研究目的に照らして有効であれば事例研究に切り替えれば良い。（木下 2009：29）

つまり、説明力のあるグラウンデッド・セオリーを得るために、意図的に個別特性を捨象してより一般化可能な範囲を確保し、その範囲の中から説明力のある理論を導き出すのである。実際、インタビュー調査のような質的データは、そのままでは含まれる情報が多く分析が非常に困難であり、それを解決するためには、木下の指摘の通り個別特性の捨象による範囲の確定が

有効となろう。ブルーマーも木下も、決して個別事例の持つ特殊性を無視して良いと言っているのではない。理論の普遍化・一般化を追求するためには、個別事例を十分に理解した上で、しかし敢えて個別性を捨象し範囲設定を行うことで、より精緻な理論構築の道筋が開ける、と主張しているのである。

では、個別具体的な生活問題の解決を志向するソーシャルワークにおいては、社会学や心理学で問われてきたような個別特殊性と客観性・科学性をどう捉えなければならないのだろうか。

そもそも、ソーシャルワーク実践では、ソーシャルワーカーが目前にする当事者の具体的な生活問題の解決が求められ、そのための情報収集や解決過程では当事者との面接が基本となる。そして面接を通して、ソーシャルワーカーは当事者のさまざまな出来事の経験（ライフイベント）と、その状況下にある当事者の問題に対する態度や行動、感情や考えまで把握しようとする。それは当事者の内面であり主観的な側面をも理解しようとする試みである。一方、個別レベルでの支援に留まらず、ソーシャルワークでは社会変革への働きかけも重要な機能であり、そのためには個別事例から生活問題の普遍的な要素を可視化させる必要がある。すなわち、ソーシャルワーク実践においては、社会学の志向する客観性と、心理学が目する個人の内面の動き双方を捉える必要がある、と指摘できよう。社会学や心理学の研究成果に学びつつ、個別事例の主体である当事者の主観性及び、当事者が抱えている生活問題の一般化可能な構造把握の双方を導き出す研究方法が求められるのである。

第2節 ライフヒストリーとライフストーリー

先述した通り、1970年代以降、世界各国、様々な分野で生活史研究が取り組まれている。これまで振り返ってきた生活史研究の歴史において、その初期には手紙や自伝、日記等が多く用いられてきたが、録音機器の発展によって今日では、主にインタビューや場面のビデオ録画等多用されるようになってきた。またこうした機器の発展から、生活史研究における個人的ドキュメントの焦点は、インタビューの生成過程に着目されるようになり、特に口述による生活史についてはライフストーリーと呼ばれるようになった。

ライフストーリーは、桜井によると、被調査者と調査者とのやり取りを記録し、テープスクリプトを作成、その後被調査者にテープスクリプトを確認してもらおうといった手順を踏む。それは、被調査者の語りは、質問をする調査者との関わりの中で生み出され構成されるという特性をもつためであると桜井は主張している。また、過去の経験を語る、という行為は、経験そのものを描写しているのではない。その経験を本人がどのように自分の中に位置づけているかによって、経験の意味は変化する。例えば、今が幸せであれば辛い過去も笑い話にできるし、今が困難な状況であれば、過去の幸せな時間への感情は複雑なものになるかもしれない。インタビューという場では、語る人の過去と〈いま—ここ〉の状況が語られるのである。桜井は社会的現実や構造は、人々の「構成物」であると考え、構築主義の立場に立って、インタビュー

及び語りを捉えようとしている。従って「いかにして語られたのか」という点に焦点を当てる（桜井 2002）。

それに対して、わが国の社会学における生活史研究の第一人者である中野は、「実証主義」と呼ばれている「客観的事実は既に存在する」ということが前提となった立場から生活史を捉えようとしている。中野の手法もインタビューの録音を行うが、それを文字として記録する際には調査者の発言は重視していない（中野 2003）。

桜井と中野の違いは、被調査者の語りをどのように解釈し記述するのか、という視点にある。桜井は被調査者の語りは、調査者との共同作業によって生み出されているから、調査者とのやり取りを抜きにして語りを時系列に整理したりすることは、被調査者の事実認識を調査者の意図に沿って改変してしまう恐れがある、と述べる。また、インタビューの場での共同作業によって語られた内容の真偽については確認する必要はない、とも述べている。一方、中野は語られた内容が歴史的事実と違う場合でも、その内容自体を否定するのではなく、歴史的事実とは異なっているということを確認する必要がある、と主張する。

確かにこれまでの生活史研究では、調査者は黒子のような存在で、被調査者との相互関係は重視されていなかった。実際、調査者の働きかけによって語られる内容は変化するのであり、桜井が〈いまーここ〉に着目する必要性を指摘したことは非常に重要であろう。一方中野は、〈いまーここ〉で構成された語りそのものよりも、語られた内容と事実がどのように違うのか、に着目し、歴史的事実とはどのようなものか、明らかにしようとした。この違いについては、江頭が興味深い見解を示している。江頭は、桜井の主張するインタビューの場〈いまーここ〉のみを重視する視点は「『木を見て森を見ず』という状況を生み出す」と指摘し、「その時代を生きた語り手/主体の歴史的多元性としてそのまま受け入れるのではなく、歴史的事実とは異なることを明らかにしたうえで、『なぜ語り手/主体が歴史的事実と異なる事実を語るようになったのか』というプロセスに目をむけるべきである」と述べている（江頭 2007）。

この江頭の指摘は、生活を経験した主体である調査対象者をどのように理解するか、新たな視点を提起している。それはこのような「なぜそのように語ったのか」という問いにより、語り手である調査対象者の内面へ迫ろうとするものである。この「なぜ」の解答は、語り手本人の内面の動きや揺らぎを浮かび上がらせると共に、その動きや揺らぎを生み出す要素としての個別特殊性及び社会的な側面、そして歴史といった側面への分析を要求するのである。

また、桜井が示したインタビューの場への着目は、ソーシャルワーカーの面接場面を考える上で非常に重要であろう。ソーシャルワーカーの働きかけで、当事者は自身に起こっている問題状況に気づいたり、理解を深める。そしてその自らの理解を自分自身の言葉でソーシャルワーカーに伝えるようになる。そのようなソーシャルワーカーと当事者との相互作用を考察する際、インタビューの場で何が行われているのか、もっと詳細に捉える必要がある。江頭の指摘を念頭におきつつ、〈いまーここ〉で語られるストーリーへの関心も重要だと思われる。そ

して生活史の解釈の前に、生活史をどのように収集しまとめるのか。今後さらに整理していかねばならないだろう。

第3節 分類をめぐる課題

ところで、従来の生活史研究の方法とは少し異なる視点で、人の人生を理解しようとする研究方法が登場している。ライフコース論である。代表的なものとしては、G.H. エルダーの『大恐慌の子どもたち』(1974)がある。エルダーは本書において、世界大恐慌を経験した二つのコーホート（オークランド成長サンプル：1920-21生まれ、パークリー・ガイダンスサンプル：1928-29生まれ）を用いて、様々な出来事が何歳頃に起こったのか、それは人の発達段階のどの辺りであったのか、人生における進学や結婚といった出来事がどのようなタイミングで起こったのか、といった点に着目し、それぞれのコーホートのライフパターンを明らかにした。その結果、発達が安定した段階で大恐慌を経験したオークランド・コーホートよりも、発達の大きな変化を伴う幼少期に大恐慌の影響を受けたパークリー・コーホートの方が傷つきやすい生活を送っていたり、学校卒業時後に第二次世界大戦が起こっていたオークランド・コーホートでは経済的な困窮を戦争産業への動員や出征等で回復している状況がある、といったライフパターンの違いが明確になった。

エルダーとジールは、ライフコースを「個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列 (sequence) のことである。ライフコースの概念は、あらかじめ決まった配列で必ずしも進行せず、時間の経過において個人が実際に経験したことの総体をなす多くのさまざまな出来事や役割を考慮に入れる点で、ライフサイクルの概念とは違っている。ライフコースの概念はまた、年齢と関連する有機体の生物学的および心理学的状態とともに、その個人の外部で発生する歴史事件や社会的相互作用を記号化することを可能にする」と定義づけている。(Elder=2003:70)

ライフコースの視点からの研究は、コーホートを設定して調査対象者を定め、継続的に調査を行う「パネル調査」を用いて行われる。そして調査対象者の生活史を調べたり、その後の変化を追跡し詳細な生活の状況をデータとして用いている。

この研究で興味深いのは、人間の発達過程と、歴史的な出来事が及ぼす発達過程への影響に着目していることだろう。これは心理学者エリクソンのライフサイクルに「時代」という要素を追加したものとして理解できる。さらに、個人への影響だけではなく、当該コーホート全体及び、前後するコーホートや親世代、子世代への影響といった社会全体の動的な様相を捉えようとする、非常に幅広い研究視点であった。

エルダーとジールはこの長年のライフコース研究から、ライフコース・パラダイムの4つの主要な要素を提起している。

- ① 時空間上の位置（文化的背景）……個人および社会行動は、異なる複数の水準にある社会的ならびに物理的な文脈を多層的に含んでいる。（中略）個人の位置の一般的な側面と独自の側面の双方が個人の経験に影響を及ぼし、だからそれは時間を組み込みつつ社会的ならびに個人的にパターン化される。
- ② 結び合わされる人生（社会的統合）……社会的行為のすべての水準（文化的、制度的、社会的、心理学的、そして社会生物学的）は、ひとつの全体の部分のみならず、同じ経験を共有している他の人たちとの接触の結果として互いに作用し、また互いに影響を与える。これらの異なる期待、規範、あるいは社会制度がどれほどうまく統合されているか、もしくは内面化されているかは一様ではなからう。（中略）いずれにせよ、研究者は、家族背景、職業、教育などの領域での異なる経験を持った人びとには相違が見出せるに違いないと考える。
- ③ 人間行為力（個人の目標志向性）……すべての力学的なシステムは時間の流れにおいて継続し、また個人は自らの必要を充たすためにその行動を環境に適応させていく。自らの必要を充たそうとする——経済的に安定すること、満足を求めること、苦痛を回避することなど——個人の集団の要因は、諸目標をめぐって積極的に意思決定を行わせ、また自らの生活の組織をもたらす。
- ④ 人生のタイミング（戦略的適応）……人びとも集団もその目的を達成するため、外部の出来事のタイミングに反応し、行動と意図し、利用できる資源を用いて出来事に対処し、行動を実行する。したがって、ライフイベントのタイミングは、個人もしくは集合体の目標を達成するための受動的また能動的な適応と理解できる。人がいつ、そしてどのようにして資産や教育を蓄え、取得し、あるいはそれらをうまく運用し、仕事に就き、また家族を作りはじめるかは、採用できる多様な戦略の事例である。（Elder=2003：49-51）

このライフコース論は、ある人の生活史を理解する視点としてライフサイクルと時代という2点を加えたこと、そして生活史研究における「分類」を考える点で興味深い。ルイスの『貧困の文化』において、同一の出来事を経験している家族構成員であっても、その年齢や立場によって受け止め方は異なることが明らかになっている。人は、その発達段階によって感じ方・理解の習熟度が異なることを踏まえれば、この視点を取り込んだ生活史の分析は重要なものとなるだろう。ある個人の生活史をどのように採り取り、記述し、分析するか、という点は、第2節でも述べた通りであり、今日でも議論が続いている。しかしこれらの議論は、主に「個人から聞き取った口述の生活史（オーラルヒストリー）の記述と分析」に関わっていた。すなわち、いかに語られたか、その語りからどのような理論が導き出されるのか、といった議論であった。しかしライフコース論では、「どのような個人の生活史なのか」という点に重きを置いているように思われる。この「どのような個人」を規定するのは、どのような社会的変化を経験したコーホートなのか、ということが前提となり、上記の4つの要素が読み取られる。

このような分類にかかわる視点は、社会学に限ったことではない。著名な心理学者であるヴィゴツキーも、その著書において「思考が考えているのではなく、人間が考えているのだ」「人間が考えるとすれば、どのような人間かが問われることになる」と述べている。(Vygotsky=2009:66)。ヴィゴツキーの指摘は、人類としての人間ではなく、個人としての人間への注視を促しているといえよう。

生活史研究において、語られた内容を分類する以前に、「どのような個人なのか」という問いからの分類を行うことは非常に重要だと思われる。なぜなら、生活史とは、ある個人が生きた人生の軌跡であり、個別特殊的なものである。したがって、具体的個人がかき消される分類では、その軌跡の持つ意味が失われてしまう可能性を有しているからだ。実際、エルダーもヴィゴツキーも、個人の特殊性を活かした分類の必要性を感じていたのだろう。そのような視点から考えると、生活史分析における何らかの分類方法として個別性を捨棄しない方向性を提示していく必要がある。それは具体的な個人の抱える生活問題の解消・解決への援助を行うソーシャルワーク実践とその研究においても重要な視点ではなからうか。

人びとの生活や人生は個別のものであり、何らかの概念化や一般化を目指しても、そこに包摂されない個別性というものは必ず残される。そのように概念化過程で排除された個別性を今一度包摂していく分類方法こそ、求められているのではなからうか。

お わ り に

最後に、人類学、社会学、心理学における生活史研究の歴史と、研究発展過程から、生活史研究の記述と分析をめぐる議論を整理してみたい。まず、人類学や社会学の先行研究からは集団や社会の構造や理論を明らかにするために、集団や社会そのものに向けられていた視点が、そこに実際に存在する個人への着目に変化していったことが明らかになった。次に、社会学においては、ある集団に属する個人の生活史に着目しつつ、社会構造を明らかにするための一般化可能な理論構築を目指した。その中では、生活史が具体的個人の生活の実相を生き生きと描き出すことを可能としている一方で、個人によって記された手紙や語りは理論構築を可能とする客観的な事実と捉える事ができるのか、というデータの解釈をめぐる課題が取り上げられた。また、心理学者であるオールポートのように、個性的記述の多面性や豊かさを評価する議論も喚起された。そこには、個別事例に含まれる事象から、どのように一般化可能な理論を導き出せるのか、という課題が提起されていたように思われる。さらに、シカゴ学派とハルハウスの関係を通して、理論の客観性・一般化を追求する研究姿勢と、ソーシャルワーク実践の協働について課題があることも発見できた。

さらに、ライフヒストリーとライフストーリーをめぐる議論では、生活史をどのように記録し解釈するのか、インタビューの場の相互作用についての議論があった。そこでは「客観的事

実とは何か」が問われていた。そしてライフコース論やヴィゴツキーの示唆からは、生活史の解釈や記述と関わって、生活史の分類方法についての重要な視点が提起されていたように思われる。それはすなわち、その生活史が、そもそもどのような個人のものであるのか、ということへの着目である。

生活史研究において、記述をどのように解釈し分析するのか。このような議論は生活史という個人的記録が用いられるようになってから今日までも継続している。しかしここまで見てきたように、社会構造や人間の心理機能の理論化には、具体的個人の生活史が重要な資料となりえることが明らかになってきた。そして今、問われているのは、「誰の」生活史か、生活史の「何を」「どのように」記述するのか、そして生活史を「どのように」分析するのかということだ、とも整理できると考える。そして「誰の」「何を」「どのように」というこれらの問いは、研究課題の異なる社会学と心理学では、求められる答えは同一ではないだろう。

一方、ソーシャルワーク研究は、具体的個人の具体的な生活問題の解決、解消を目指すという志向があるため、一般化可能な理論構築を目指す社会学や心理学とは異なる特徴を持つ。したがって、ソーシャルワークにおける生活史研究では、社会学や心理学で形成された様々な理論を取り込み、かつ明らかになってきた分析や記述の課題を乗り越えながら、具体的な生活問題の把握及び解決を可能とする生活史研究を展開しなければならない⁽⁴⁾。

これまでもソーシャルワーク研究では、生活問題を抱えている当事者の理解や、社会問題として生活問題を捉えるために、当事者の生活史は積極的に用いられてきた。それはシカゴ学派とハルハウスの関係からも明らかである。わが国でも、江口が貧困問題の性格を明らかにするために低所得者層の生活史を分析する必要性を指摘していたり（江口 1979）、様々な実践報告において個別事例の生活史が取り上げられている。また、具体的な生活史の取り上げ方については、アセスメントと関わりながら具体的な方法も提案されてきた。（大野 2007 など）しかし、社会学や心理学が、理論化を目指して果敢に取り組んできた生活史の記述や解釈をめぐる議論をみていると、ソーシャルワーク研究は具体的な生活史研究の方法についての議論はまだまだ不十分なのかもしれない。例えば、当事者が経験した事実の把握については、アセスメント段階で注目され整理されるものの、面接において当事者がどのように自らの経験を語っているのか、当事者の内面に社会的諸条件がどのように影響したのかといった分析視点は、あまり議論されていないように思われる。また、生活史は当事者の抱える生活問題によって、生活史の「何を」「どのように」記述するのか、という視点は異なるが⁽⁵⁾、今後は領域ごとの課題に対応する生活史研究が必要となるだろう。

これらを踏まえ、今後はソーシャルワークにおける生活史研究として、先述したような「誰の」生活史か、生活史の「何を」「どのように」記述するのか、そして生活史を「どのように」分析するのか、といった問いへの答えを整理したい。

〔注〕

- (1) 本書については、アメリカにおける「ホームレス」という用語の取扱い状況が今日と異なっている様子が伺え、非常に興味深い。
- (2) なお、秋山は、初期シカゴ学派とハルハウスの交流によって双方が発展したのであり、またお互いの志向性の違いから交流は途絶えたものの、社会調査の場を通して両者が協力することは可能である、と述べたシカゴ学派バージェスの意見にも触れている。このような両者の交流過程については、今日のソーシャルワーク研究と社会学研究のあり方を考える上で参考になろう。
- (3) 庶民生活研究会では「激しい変動の時代を支えていき抜いてきた人びとであるにも拘わらず、具体的にはこの時期にどのように選択をし、また選択させられてきたか、その生活の実態は、彼らの生活に多様性のままに、必ずしも明らかでなかった」ことから、このような研究に取り組んだという。
- (4) 国際ソーシャルワーカー連盟によるソーシャルワークの定義では、「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り、人びとのエンパワーメントと解放を促していく。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する。人権と社会正義の原理は、ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」と述べられているが、ここでも「人間の行動と社会に関する理論を利用して」と社会学や心理学等隣接する学問理論の応用が指摘されている。
- (5) この点について、真田は社会福祉技術に関わって以下のように述べている。「技術の実効的な機能ということになると、個性単位にまで解析していくことはできないが、少なくとも対象者が巻き込まれている社会問題の種類別につくり上げることが必要のように思う。高齢者問題への指針、児童問題への指針、障害者問題への指針などである。ここまでつくれると、各段階の主要な輪もある程度想定することができるようになり、さらに実行性が増すと思われる。社会福祉の技術は、社会福祉の領域ごとに客観化され、体系化され、蓄積されるという形になる。」(真田2003:157)

〔引用文献〕

- 秋元律郎 (2001) 「初期シカゴ学派社会学とハル・ハウス」『人間関係学研究』(大妻女子大学人間関係学部紀要) (2), 291-302
- Allport, G. W. (1942) The Use of Personal Documents in Psychological Science, Social Science Research Council (=1970 大場安則訳『心理科学における個人的記録の利用法』培風館)
- Anderso, N. (1923) The Hobo: The Sociology of The Homeless Mann, The University of Chicago Press (=1999 広田康生訳『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学』(上)(下)ハーベスト社)
- Blumer, H. (1939) An Appraisal of Thomas and Znaniecki's "The Polish Peasant in Europe and America, Social Research Council (=1991 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房, =1983 桜井厚訳『生活史の社会学』御茶の水書房)
- 江口英一 (1979) 『現代の低所得者層』未来社
- Elder, G. H. (1974) Children of the Great Depression: SoRecial change in life experience, University of Chicago Press (=1991 本田時雄・川浦康至ほか訳『大恐慌の子どもたち——社会変動と人間発達』明石書店)
- 江頭節子 (2007) 「社会学とオーラル・ヒストリー——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』(585), 11-32
- Giele, J. Z. & Elder, G. H. (1998) Methods of Life Course search: Qualitative and Quantitative

- Approaches, Sage Publications（=2003 正岡寛司・藤見純子訳『ライフコース研究の方法 質的ならびに量的アプローチ』明石出版）
- 木下康仁（2009）『質的研究と記述の厚み——M-GTA・事例・エスノグラフィー』弘文堂
- Langness, L. L.（1965）The Life History in Anthropological Science, Holt（=1993 米山俊直・小林多寿子訳『ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ』ミネルヴァ書房）
- Lewis, O.（1959）Five Families: Mexican Case Studies in the Culture of Poverty, Basic Books（=1970 高山智博訳『貧困の文化——5つの家族』新潮社）
- Lewis, O.（1961）The Children of Sanchez: Autobiography of a Mexican Family, Random House（=1969 柴田稔彦・増田義夫訳『サンチェスの子供たち』みすず書房）
- Mills, C. W.（1959）The sociological imagination, Oxford University Press（=1965 鈴木広訳『社会学の想像力』紀伊國屋書店）
- 森岡清美・塩原勉・本間康平（1993）『新社会学辞典』有斐閣
- 中野卓（1977）『口述の生活史』御茶の水書房
- 中野卓（2003）『生活史の研究』東信堂
- 中村利昌（1992）「ジェーン・アダムス『ハルハウス』とシカゴ学派第一世代」『社会学論叢』（日本大学社会学会）(109), 74-87
- 大野勇夫・川上昌子・牧洋子編（2007）『福祉・介護に求められる生活アセスメント』中央法規
- Plummer, K.（1983）Documents of Life: An introduction to the problems and literature of humanistic method, Allen & Unwin（=1991 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学』光生館）
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学』せりか書房
- 真田是（2003）『新版 社会福祉の今日と明日』かもがわ出版
- Shaw, C. R.（1930）The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story, The University of Chicago Press（=1999 玉井真理子・池田寛訳『ジャック・ローラー』東洋館出版）
- 庶民生活史研究会編（1989）『同時代人の生活史』未来社
- 高山龍太郎（2003a）「J. アダムスとシカゴ学派第一世代」中村正大・室月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- （2003b）「範例としての『ポーランド農民』」中村正大・室月誠編『シカゴ学派の社会学』世界思想社
- Whyte, W. F.（1943）Street Corner Society: The Social Structure of an Italian Slum, The University of Chicago Press（=2000 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナー・ソサエティ』有斐閣）
- Vygotsky, L. S.（1929）Concrete human Psychology（=2009 伊藤美和子他訳「人間の具体心理学」ヴィゴツキー学協会『ヴィゴツキー学』(10), 61-72

（なかの かなこ 社会福祉学研究科社会福祉学専攻博士後期課程）

（指導：植田 章 教授）

2010年9月30日受理